デニス・ジョンソンの『笑う怪物たち』
―― あるいはスパイ仕掛けのメタフィクション

平　川　　和

要　旨

2017 年に逝去したデニス・ジョンソンは、小説家の他に、詩人・戯曲家・ジャーナリストなど多様な肩書きを持つ作家であった。短編集『ジーザス・サン』（1992）でカルト的人気を博し、長編小説『煙の樹』（2007）で全米図書賞をしたことで現代アメリカ作家として盤石の地位を築いたと言えよう。一方で、上記 2 作品以外には、それほどジョンソン作品の研究が進んでいないのが現状である。本稿では、ジョンソンが生前に発表した最後の長編小説『笑う怪物たち』（2014）に焦点を当て、彼のジャーナリストとしての横顔にも着目しつつ、作品のメタフィクショナルな読解を試みる。

『笑う怪物たち』はアフリカを舞台にしたスパイ小説である。しかし、主人公のネアはスパイとしてはあまりにも無能で、何ひとつ任務を果たすことはない。ならば、『笑う怪物たち』は反スパイ小説なのだろうか。いや、この小説が極めてスパイ的性質を帯びるのは、物語内容においてではなく、むしろメタフィクショナルな次元においてである。この小説では、現実を偽るスパイの偽装工作を、虚構を生み出す作家の創作行為に重ね合わせて読むことができる。また、語り手ネアの語りが途中から「日記調」に変化することで、この物語が「書かれたもの」であるという意識が先鋭化する。さらに、とりとめのない内容を記述したネアの日記には、アフリカの暗部を伝えるジャーナリズム的な筆致も見られる。journal という単語が「日記」と「新聞」の両方の意味を持つことを鑑みれば、ネアの書く文章を「日記に偽装した新聞」として読み替えることが可能だろう。『笑う怪物たち』は、小説そのものが偽装するというメタ的なスパイ・パフォーマンスをしているのである。

1. 疎外される読者　――（反）スパイ小説としての『笑う怪物たち』

本稿が扱う『笑う怪物たち』（*The Laughing Monsters*, 2014）は、デニス・ジョンソン（Denis Johnson, 1949-2017）が生前に出版した最後の長編小説である。まずはあらすじを簡単に紹介しよう。舞台は 2011 年のアフリカ。主人公ローランド・ネア（Roland Nair）は NATO（北大西洋条約機構）の諜報機関に所属するスパイである。彼が組織から与えられた任務は、アフリカに潜伏するコンゴ人の傭兵マイケル・アドリコ（Michael Adriko）と接触すること。マイケルはアメリカ軍に所属していたが、無断で軍から脱走したために、NATO から危険人物とみなされている。物語は、ネアがシエラレオネに降り立ち、マイケルを捜し始めるところから始まる。

と、ここまで聞けば、この小説が「スパイ・フィクション」なるジャンルに分類されると思う読者も多いだろう。しかし、物語の内実に目を向ければ、この小説が近年のスパイ・フィクションの傾向をなぞっているとは言い難い。上岡伸雄によると、2000 年以降のスパイ・フィクションでは、「アメリカの外交政策や CIA の戦略が批判的に描かれても、主人公の英雄的な活躍で帳消しにされてしまうことが多い」（124-125）。一方、『笑う怪物たち』の主人公ネアは決して英雄視されるようなスパイで

はない。まず彼は、初めから任務を遂行する気などなく、組織を容易に裏切ったうえ、捜査対象であるはずのマイケルと手を組み、テロリズムを助長するような危険なビジネスに加担しようとする。というのも、ネアとマイケルは旧知の仲で、ネアにとってマイケルは命の恩人でもあったからである。それゆえ、ネアは組織よりもマイケルとの友情を優先した……かと思いきや、ネアはそのマイケルさえも裏切る。ネアのこれら一連の行動は、道徳的な動機から生じるものではなく、欲望のままにふるまった結果生じるものである。このような主人公は決して英雄などではなく、むしろ「アンチ・スパイ・ヒーロー」とでも呼ぶべきだろう。仮に近年のスパイ・フィクションの条件が英雄的なスパイを主人公に据えることだとしたら、『笑う怪物たち』はその逆を行く「アンチ・スパイ・フィクション」だと言っても過言ではない。

以下は、ジョイ・ウィリアムズ（Joy Williamas）が『ニューヨーク・タイムズ』（*The New York Times*）に寄せた『笑う怪物たち』についてのレヴューからの抜粋である。

> On the plane I was reading this book [*The Laughing Monsters*].
> “Do you like Denis Johnson?” the woman beside me asked.
> “Yes,” I said.
> “I’ve always felt he doesn’t like his characters very much,” she said.
> “O.K.,” I said.
> She had gone to a writing program, had graduated from a writing program but no longer wrote, possibly because her characters’ demand for respect and compassion became too onerous.（Williams 下線は筆者による）

ウィリアムズは飛行機のなかで『笑う怪物たち』を読んでいた際に、隣に居合わせた女性とデニス・ジョンソンについて会話している。かつて作家志望だったその女性は、「ジョンソンは自分のキャラクターをあまり好ましく思っていない」と感じているようである。女性が言うように、ジョンソンのキャラクターは極端に頽廃的な人間として描かれているので、それを生み出した作家ですら嫌悪感を抱いてしまうのかもしれない。『笑う怪物たち』の主人公ネアも、その例外ではない。良心的な読者なら、その愚劣さゆえにネアに心から感情移入できないため、物語の中に入り込めず、むしろ物語から疎外されてしまう危険性すらあるだろう。

だが、仮にこの「読者の物語からの疎外」があらかじめプログラムされたものであるとしたらどうだろうか。つまり、ジョンソンはあえて感情移入しづらいキャラクターを設定することで、読者が物語の中に入り込むことを意図的に妨害しているのかもしれない。それは裏を返せば、「物語を内部からではなく外部から見つめろ」という彼のメッセージとして捉えることができるかもしれない。つまり、ジョンソンは読者にメタレベルからの読解を要請しているのではないだろうか。

そこで本稿では『笑う怪物たち』に対するメタフィクショナルな読みの可能性を提示したい。というのも、この小説は、一見「反スパイ小説」に見えながらも、実は極めてスパイ的な性質を帯びる可能性を秘めており、その可能性が実現するのはメタフィクショナルな次元においてなのである。この逆説こそが『笑う怪物たち』という小説の醍醐味の 1 つになりそうだが、しかし、本稿では「ジョンソンがスパイ小説をメタフィクション仕立てにすることで新たなジャンルの可能性を切り拓いた」などと主張するつもりはない。かつて、メタフィクション研究の泰斗パトリシア・ウォー（Patricia Waugh）が述べていたように、「メタフィクションは全ての小説に内在する傾向か機能」（5）なのであり、だとすればスパイ小説もその例外ではないはずである。むしろ「スパイ」というモチーフそれ自体は、メ

タフィクションと極めて相性が良いように思われる。

しかし、スパイ小説が文学研究の俎上に載せられる際、その社会性や政治性ばかりに焦点が当てられることが多い。スパイ小説研究にはデイヴィッド・シード（David Seed）やアンドリュー・ペッパー（Andrew Pepper）が詳しいが、彼らの論考で主に議論されているのは「愛国心」や「冷戦」、「パラノイア」や「グローバル・ジオポリティクス」といったものである。このようにスパイ小説は、そのメタフィクション性が真正面から論じられる機会は少ないように感じられる。そこで本稿では、作品の社会性や政治性は一旦脇に置き、まずはスパイ小説にもともと内在しているメタフィクション性を白日の下に晒してみたい。しかし最終的には、そのメタフィクション性を明らかにしてこそ初めて浮かび上がる、作品の社会性・政治性にも目を向けてみたい。

2. メタファーとしてのスパイ行為

まずは、「スパイ行為」と「作家の創作行為」との相性の良さについて、作中の具体的なシーンを取り上げながら考察していきたい。以下はネアがトイレにいる場面からの引用である。

> The toilets, two of them, were set into the floor, each with a foot pedal for flushing. I [Nair] examined the tiles on all four walls, fiddled with the mirror, ran my fingers around the windowsill. I tried lifting the posts of the divider between the two toilets—one came loose from the floor. With my finger I scratched a delve at the bottom of its hole, dropped the tiny package in, and replaced the post to cover it.
>
> For the sake of realism, I pressed the pedal on one of the toilets. It didn't flush. The other one sprayed my shoe. (21 下線は筆者による)

ネアはトイレにいながらも、そこで用を足しているわけではない。“tiny package” の中には機密データの入った USB が包まれている。彼はトイレの中でこの USB の隠し場所を探しているのである。無事に USB を隠し終えたネアは、「現実感を出すため」（“For the sake of realism”）にトイレの水を流す。ここが重要なポイントである。ここでネアは、実際には用を足していないにもかかわらず、「用を足した」という虚構（フィクション）を紡ぎ出しているのである。スパイは、その職務の性質上、必要以上に現実を偽装しなければならない。だとすれば、スパイ行為とは「作家がフィクションを創作する行為」の格好のメタファーだと言っても過言ではないだろう。

さらに、この物語の語り手がネアであることに着目すれば、この小説のメタフィクション性がより顕在化する。つまり、「ネアが自身の偽装工作について語ること」は、「語り手が自身の物語創作について語ること」に他ならない。この「物語の創作をめぐる自己言及性」こそが、この小説におけるメタフィクション的特徴の一つと言える。

ただ、ここで指摘しておかなければならないのは、ネアがトイレでの偽装工作に失敗しているという点である。再び上記引用に目を向けると、トイレが壊れていて水が流れなかったとある。つまりネアは、偽装工作＝フィクション作りに失敗しているのである。挙句の果てには、別の便器から水が飛び出て、彼の靴にかかってしまう。ネアは自分が偽装しようとした現実の方からバックラッシュを浴びせられる始末である。このことは、ネアがスパイとしてだけでなく、物語の紡ぎ手としても無能であることを物語っている。

3.「家の不在」をめぐる「退屈論的存在論」

そんな語り手として無能なネアが絶大な信頼を寄せるキャラクターが、マイケルである。マイケルは基本的に陽気で破天荒なキャラとして描かれ、彼と一緒にいたら退屈はしないが、トラブルに巻き込まれることもしばしば、といった具合である。そんなマイケルは、ネアに危険なビジネスの話を持ちかけ、それで一儲けして王様のような暮らしを送ろうぜ、と提案する。ネアはそのようなマイケルを「魔法使い」に喩えながら高く評価している。

> And while you, my superiors, may think I've [Nair has] come to join him [Michael] in Africa because you dispatched me here, you're mistaken. I've come back because I love the mess. Anarchy. Madness. Things falling apart. Michael only makes my excuse for returning.
>
> And if he thinks I'd like an army and a harem, Michael mistakes me too. I don't want to live like a king—I just want to live. I can't make it happen by myself. I've got all the ingredients, but I need a wizard to stir the cauldron. I need Michael.（49 下線は筆者による）

ネアは、自らが生きる物語を紡ぐにあたり、マイケルという一登場人物に依存せざるを得ない。なぜなら、マイケルの破天荒さは常に物語に劇的な展開をもたらしてくれるからである。言い換えるなら、ネアはマイケルなしでは物語を展開することができないのである。

そして、これこそが、ネアが組織を裏切る理由に他ならない。ネアは自身の物語に劇的な展開を欲しているのだが、現状ではそれが叶わない。現在ネアは、表向きの仕事として IT 企業の会計業務をしているのだが、彼はその仕事を "dull stuff"「退屈な仕事」（40）だと感じている。そこでネアはマイケルの誘いに乗って危険なビジネスに身を投じていくのだが、マイケルはネアをそのビジネスに誘い入れる際に次のように問いかけている。

> "Then understand this one: Do you really want to go back to that boring existence?"
>
> "Never."
>
> This much was true, the only true thing between us.（109 下線は筆者による）

「あの退屈な日々に逆戻りしたいのか？」というマイケルの問いに対するネアの答えは「絶対に嫌」である。つまり、ネア、そしてマイケルも、単に「退屈な日々」を送ることが嫌なのである。退屈から逃れるためなら、彼らは死の危険さえも厭わない。実際、彼らは危険なビジネスに手を染めた結果、死にかける。それでも退屈から逃れたい ——これこそが、「二人の間にある唯一の真実」であり、彼らのあらゆる行動を支える動機に他ならない。

ここで「退屈」に関する哲学的議論を参照することで、後半のメタフィクションの議論へ橋渡しをしたい。哲学には「退屈論」という分野がある。近年ではラース・スヴェンセン（Lars Svendsen）や國分功一郎がこれに関する研究書を出版しているが、両者の退屈論はある思想家を共通の出発点に持つ。それは 17 世紀フランスの思想家パスカル（Pascal）である。スヴェンセンは、パスカルこそが「退屈についての最初の偉大な理論家」だと断言している。そのパスカルは、人間の不幸について次のように述べている。

人間の不幸というものは、みなただ一つのこと、すなわち、部屋の中に静かに休んでいられないことから起こるのだという。生きるために十分な財産を持つ人なら、もし自分の家に喜んでとどまっていられさえすれば、なにも海や、要塞の包囲戦に出かけて行きはしないだろう。（パスカル 92 下線は筆者による）

パスカルの主張は極めて単純である。彼によれば、人間の不幸の原因は「家にずっととどまっていられないこと」にあるという。同じ場所で同じことを繰り返す毎日、つまり、反復的な日常は人を退屈させる。この退屈に耐えられないがために、人は家を飛び出し、あえて危険なことに身を投じさえするのである。

退屈を忌避するネアやマイケルもまた、家でじっとしていられない質なのは明らかである。というより、彼らには帰るべき家がないと言った方が正しいだろう。ネアは、アメリカ生まれだが、アメリカに彼の帰る家はない。幼い頃にネアは、デンマーク人の父親とともにアメリカの家を追い出され、その後は父親とともにヨーロッパ各国を転々としてきた。ネアは一応デンマーク系アメリカ人になるのだが、デンマークにもアメリカにも彼のアイデンティティの帰属先はない。つまり、ネアにはアイデンディティを帰属させるべき「ホーム」がないのである。

ネアが常に既に「ホーム」を喪失したアイデンティティ難民ならば、マイケルは文字通りの難民となる。彼は幼少期にアフリカの内戦の混乱のなかで故郷を追われ、その後は傭兵として世界各地の戦場を転々としてきた。コンゴにあるマイケルの生まれ故郷に帰ることが物語のメイン・プロットになっているのだが、いざ故郷に着くと、そこはディストピア化していたため、彼の帰郷願望が叶うことはない。

このように、ネアとマイケルは帰りたくても帰れる家がない。つまり彼らは、家で退屈することを許されない存在なのであり、危機的状況に自ら身を投じることを運命づけられたキャラクターなのである。

4. 変化する文体、偽装する小説

この小説は 4 章構成になっているが、第 3 章に入るとネアは極めて危機的な状況に陥る。それと同時に、この小説のメタフィクション性が一気に顕在化していく。どんな危機かというと、ネアはコンゴの武装グループによって監禁されるのである。第 2 章の終盤で、ネアとマイケルは例のビジネスに失敗し、逃走を余儀なくされる。その逃走中に武装グループから襲撃を受け、ネアは捕虜として監禁される一方、マイケルは行方知れずとなる。これは語り手のネアにとって極めて危機的な状況である。まず、マイケルという魔法使い的キャラを失ったことで、物語が膠着する恐れがある。また、監禁とは身動きが取れず「退屈極まりない状態」を強いられることなので、退屈を忌避するネアにとっては最も憂慮すべき事態なのである。

そんな監禁状態に置かれたネアにとって、唯一の「退屈しのぎ」が日記を書くことである。彼はほとんどの所持品を奪われた代わりに、監禁者からノートと鉛筆を与えられる。その時点からネアは、意識の流れさながら、とりとめのない叙述をノートに書き殴っていく。と同時に、ネアの語りは、通常の語りから「日記調」へと移行する。以下は第 3 章の書き出しである。

[OCT 15 11PM]

All right, Tina. The chief captor, the witch doctor, the general, the jailor or kidnapper or whatever he is, has just showed me my favorite thing in East Africa, a plastic baggie that would fit exactly in a shirt pocket, and shows me the label, “40% Volume Cane Spirits 100ml,” before biting off the corner and sucking it dry, explaining, “It’s for the cold,” and tossing it aside, and I notice, right now, that the dirt floor of this big low hut we’re in is littered with similar packets sucked empty and tossed aside—paved with them—“Rider Vodka” and “ZAP Vodka” and the Cane Spirits. (131)

この章から突然、パッセージの冒頭ごとに日付と時刻が記載され始める。これは、ネアが日記をつける際、常にそれを書いた日時を記載していることを意味しており、彼は監禁を解かれた後も日記を書き続けることになる。

このように文体が日記調にシフトしたことによって、この物語が「書かれたもの」であるという意識が先鋭化される。その意識をさらに強化するのは、ネアが日記のなかで何度も反復するある言葉である。

If I somehow crawl free of this mess, I’ll transcribe and transmit those pages to you, and I may even take time one day to set down an account of things, everything, beginning—17 days ago? Really, only 17 days? （159 下線は筆者による）

[OCT 30 NOON]

Davidia, and Tina—

If this communication has come to you raw, before I’ve had a chance to transcribe these notes properly—or blend them with my someday semi-honest account—then you see the ink. No more pencils. You see my hand is sturdy. You’re looking at a fresh page. （216 下線は筆者による）

“transcribe”「書き写す」という言葉を反復するネアは、今自分が書いている煩雑な文章が今後「編集」される必要があることに対して自意識的である。つまり、この物語を読んでいる読者には「未編集」の文章が届けられているのであり、ここでは「物語の編集」というメタフィクショナルなテーマが前景化されている。と同時に、この物語は、今後差異を生じながら無限に反復されていく可能性をも孕み持つのである。

しかし一方で、見たものをありのままに書き綴るネアの文章は、アフリカの暗部をくまなく見つめようとする眼差しも携えている。例えば彼の日記は、アフリカで国境なき医師団が十全に機能していないこと（195）、先進国による貴金属の搾取によってアフリカの大地が汚染されていること（196）、さらには以下の引用にあるように、民族紛争によって血塗られたアフリカの歴史をも伝えている[1]。

It was during the reprisals. Our clan did nicely, you know, during the time of Idi Amin Dada, because he was Kakwa too. But when he ran away, the machetes came out against the Kakwa, and this creek ran with our blood. I returned here after the village was taken over . . . This is where it happened. I heard two people talking in a hut, only their voices, not the words, not even the kind of voice—man or woman or child—and I threw in a stick of dynamite. The hut was right over there. You walked through my first murders with your feet.... （218-19 下線は筆者による）

このようなリアルなアフリカ描写は、ジョンソンがジャーナリストとしてアフリカを実際に取材した経験に少なからず基づいているはずである。だとすれば、ネアの日記は「ジャーナリズム的な筆致」も携えているといえるだろう。

ここで、英語の journal という単語に着目してみれば、それは一方では「新聞」という意味を持ち、他方では「日記」という意味を持つことに気づく。このような言葉遊びに目を向けるとき、ネアの日記を「新聞」としてメタ的に読み替えることが可能になる。あるいは、ネアの書く文章を、日記に偽装したジャーナリズム的文章と捉えても差し支えないだろう。だとすれば、この『笑う怪物たち』という小説は、物語内のキャラクター以上に、小説そのものが「偽装する」というメタ的なスパイ・パフォーマンスをしていると言える。実際、現実の世界では、ジャーナリストに偽装したスパイが多々いるようだが、この小説はその逆で、スパイ小説に偽装したジャーナリズム的小説とでもいうべきだろうか。いずれにせよ、『笑う怪物たち』が極めてスパイ的な性質を帯びるのは、その物語内容においてではなく、この偽装を施したメタフィクション構造においてなのである。

5. ジョンソンのメタフィクショナル戦略（ストラテジー）── ポスト 9・11 的文脈のなかで

最後に、このスパイ仕掛けのメタフィクション戦略を、9・11 以後の国際社会におけるスパイとジャーナリズムの関係から捉えてみたい。『笑う怪物たち』では、9・11 以後の国際社会について以下のように述べられている。

> We talk about how the world has changed since the Twin Towers went down. I think you could easily say the part that's changed the most is the world of intelligence, security, and defense. The world powers are dumping their coffers into an expanded version of the old Great Game. The money's simply without limit, and plenty of it goes for snitching and spying. In that field, there's no recession.（122 下線は筆者による）

9・11 は、諜報や安全保障のあり方を大きく変え、世界ではスパイ活動が際限なく横行するようになった。このような事態を受け、現実世界では、2015 年にアメリカ国防総省が米軍向けのあるガイドラインを発表して物議を醸した。そのガイドラインでは、ジャーナリストをスパイになぞらえ、「敵性戦闘員」として取り締まってよいという内容が示唆されていたのである。これに対し『ニューヨーク・タイムズ』の論説は、次の引用にあるように猛反発し、報道の自由を脅かすようなガイドラインを取り下げるよう訴えた。

> Equally bizarre is the document's suggestion that reporters covering wars should operate only with the permission of "relevant authorities" or risk being regarded as spies. To cover recent wars, including the civil war in Libya in 2011 and the war in Syria, reporters have had to sneak across borders, at great personal risk, to gather information. For the Pentagon to conflate espionage with journalism feeds into the propaganda of authoritarian governments. Egypt, for instance, has tried to discredit the work of Western journalists by falsely insinuating that many of them are spies.（"Pentagon's" 筆者は下線による）

このように 9・11 以後の国際情勢をめぐって、報道の自由を謳うジャーナリズム的言説と、その言説を抑圧しようする国家権力との間で相克が生じているのがわかる。もし『笑う怪物たち』がスパイ

小説を装ったジャーナリズム的小説ならば、この小説はジャーナリズムの立場から権力に対抗していると言えるのだろうか。

いや、この小説の位置づけはそんなに単純ではない。というのも、小説家ジョンソンはジャーナリストとして活動しながらも、既存のジャーナリズムについて批判的な眼差しを向けているのである。

> When he [Denis Johnson] returned from the gulf, I [Blythe] checked in to see how the story was coming. "I'm really sorry, man, but I can't write it," he said. He was apologetic, but firm. He seemed rent by the war, and irked by the professional obligation to make mere copy out of bloodshed. He [Johnson] never viewed himself as a journalist. "The real journalists, the regularly employed, they sneer at me," he wrote later in an essay. "But in my story, they're a pack of lemmings who don't care about the truth or the feeling or the sights and sounds or the faces and the voices—only about the stock images, the stock phrases, the news that's making everybody tired." (Blythe 下線は筆者による)

上記引用にあるように、ジョンソンは自分自身をジャーナリストとして見ていない。なぜなら、彼は戦争の現場があまりにも惨すぎて報道することができず、ジャーナリストとしての自分の無能さを自覚しているからである。その一方でジョンソンは、実際のジャーナリストたちがしていることを痛烈に批判している。彼から見たら、ジャーナリストたちはストック写真のように使い回しながら悲惨な現場のイメージを世に流通させているだけで、その場の真実や感情などには全く関心を払っていないのである。ジャーナリズムがそのように軽薄なものだとすれば、ジョンソンの目には、ジャーナリズムと権力の対立は極めて不毛な応酬にしか映らないだろう。

おそらくジョンソンにとって、真実をより効果的に伝える方法は、自分が見た現実をフィクションとして再構築・再編集することなのではないだろうか。つまるところ、彼が『笑う怪物たち』をメタフィクション仕立てにすることで試みたのは、ジャーナリズム的筆致を換骨奪胎しつつ、スパイ的手法で権力の包囲網をかいくぐりながら、われわれ読者に真実を密告することだったのではないだろうか。だとすれば『笑う怪物たち』は、ジャーナリズム対権力という対立をはるかに超越した視座から、世界の真実を伝えようとしているのである。

注

1　直後の引用にある Idi Amin Dada（1925-2003）は実在した元ウガンダ大統領であり，国民約 30 万人を虐殺したとして「アフリカでもっとも血にまみれた独裁者」と称された.

引用・参考文献

Blythe, Will. "A Lot Like Prayer: Remembering Denis Johnson." *The New York Times*, 24 July 2017, www.nytimes.com/2017/07/24/books/review/will-blythe-remembering-denis-johnson.html. Accessed 30 Nov. 2018.

"Fiction—Spy Novels." *Spies, Wiretaps, and Secret Operations: An Encyclopedia of American Espionage*. 2011. *Google Books*, books.google.co.jp/books?id=91FyAJDjAvQC&printsec=frontcover&dq=spies+wiretaps&hl=ja&sa=X-&ved=0ahUKEwi_isfMmL7YAhVFrJQKHR_9DqMQ6AEIJzAA#v=onepage&q=spies%20wiretaps&f=false. Accessed 30 Nov. 2018.

Johnson, Denis. *The Laughing Monsters*. 2014. Harvill Secker, 2015.

---. *Seek: Reports from the Edges of America & Beyond*. Harper Collins, 2001.

"The Pentagon's Dangerous Views on the Wartime Press." Editorial. *The New York Times*, 10 Aug. 2015, www.nytimes.com/2015/08/10/opinion/the-pentagons-dangerous-views-on-the-wartime-press.html. Accessed 30 Nov. 2018.

Pepper, Andrew. "Who Knows What's Going On?: Mapping New Security Landscapes in Contemporary Espionage Fiction." *Journal of American Studies*, vol. 49, no. 4, 2015, pp. 775-92. *ProQuest*, doi:10.1017/Soo21875815001711. Accessed 30 Nov. 2018.

Seed, David. "American Spy Fiction." *The Cambridge Companion to American Crime Fiction*, edited by Catherine Ross Nickerson. Cambridge UP, 2010. pp. 86-95.

Sunyer, John. Review of *The Laughing Monsters*, by Denis Johnson. *Financial Times*, 21 Feb. 2015, www.ft.com/content/ea2dbf5a-b37f-11e4-a45f-00144feab7de. Accessed 30 Nov. 2018.

Swedlund, Eric. Review of *The Laughing Monsters*, by Denis Johnson. *Paste*, 3 Dec. 2014, www.pastemagazine.com/articles/2014/12/the-laughing-monsters-by-denis-johnson-review.html. Accessed 30 Nov. 2018.

Waugh, Patricia. *Metafiction: The Theory and Practice of Self-conscious Fiction*. Methuen, 1984.（『メタフィクション——自意識のフィクションの理論と実際』結城英雄訳，泰流社，1986.）

Williams, Joy. Review of *The Laughing Monsters*, by Denis Johnson. *The New York Times*, 7 Nov. 2014, www.nytimes.com/2014/11/09/books/review/the-laughing-monsters-by-denis-johnson.html. Accessed 30 Nov. 2018.

上岡伸雄『テロと文学 —— 9・11 以後のアメリカと世界』集英社，2016.

國分功一郎『暇と退屈の倫理学』太田出版，2015.

スヴェンセン，ラース『退屈の小さな哲学』鳥取絹子訳，集英社，2005.

パスカル『パンセ』前田陽一・由木康訳，中央公論社，1973.

Denis Johnson's *The Laughing Monsters*: Or, a Spywork Metafiction

Nodoka HIRAKAWA

Abstract

Denis Johnson, who died in 2017, is an American novelist with a long list of titles such as poet, playwright, and journalist. He has established a considerable reputation for his short story collection *Jesus' Son* and his novel *Tree of Smoke*, which won the National Book Award for Fiction. On the other hand, except for the above-mentioned books, his other works have not yet been studied enough. So, this paper focuses on Johnson's last novel *The Laughing Monsters* (2014), noting his profile as a journalist and revealing the metafictionality of this novel.

The Laughing Monsters seems to be a kind of spy fiction set in Africa. However, the protagonist Nair, incompetent as spy, cannot carry out any missions. Does this mean *The Laughing Monsters* is an "anti-spy fiction"? In fact, this novel can be a spy novel not for the contents of its story but for its metafictionality. In this novel, spies' diversionary maneuvering to disguise facts can be regarded as novelists' writing to create fiction. In addition, the shift of Nair's narrational mode to the diary form emphasizes that this story is "written." Moreover, Nair's diary, which seems to be nothing but rambles, has an aspect of journalistic writing which reports the dark side of Africa. In that the word "journal" means both "diary" and "news report," Nair's writing can be defined as "news report" disguised into a diary. *The Laughing Monsters* can thus be a spy novel in that the novel itself does a spy performance by disguising another form of writing.